

# ロンドンタクシーによる 古林伸美さんの温泉案内

野口冬人：平成二〇年二月作成

## 前編



### 【リード】

湯原温泉へまいりますと、まずレトロチックなロンドンタクシーが走りまわっているのが目に付きます。「プチホテルゆばらリゾート」のオーナーであり、湯原観光協会会長の古林伸美さんの自慢の地球環境にやさしいエコディーゼルエンジンのくるまでです。古林さんはこのロンドンタクシーで湯原温泉の観光ポイントを案内してくれます。エコツアーのコースは、20分コース、30分コース、50分コースなどがあります。この前編では湯街をご案内しております。



## 【本文】

それでは、これからエコツアーにご案内いたします。

いまクルマの停まっておりますこのあたり、昔からの温泉街の中心地でございます、ゆばらリゾートのうしろのあたりのちょっと下流になるのですが、村役場があって、いまでもここには郵便局があるという中心地だったわけです。なぜかといいますと、ようするに昔から温泉がすべての中心だからということで、行政などの機関も温泉に近いところにあつたわけです。こちらのほうは「つづみ橋」といわれるところです。左側の絵をみていただきますと、「街角物語」と書いてございます。これに湯原温泉の由来が書かれております。

## 湯原温泉の泉源と 湯原温泉的な温泉の利用法

いまクルマの停まっている位置から上流にかけまして、昔はすべて河原でございました。そこに自然にお湯が噴き出してくる場所が無数にありまして、そこを岩で囲って露天風呂をズラっと、多いときには二十ぐらいあつたそうです。またその河原自体が地熱で暖かいのでその上に小屋を建てて冬の寒さをしのいだとも言われています。ただし、自然の川のなかのお風呂でございます。増水いたしますと使えなかつたりという不便な面もあつたわけでございます。そのうち時代を経るごとに石垣を築き、壁を築き、多少の水には平気な状態にいたしました。さらにそのうえに湯屋を建て、現在のような街になった訳です。

こちら、湯本温泉館が左にございますけれども、現在は各所で湧きました露天風呂のお湯をすべてこちらに集めまして、「ここが湯原温泉のキモでございますが」、温泉が冷めない範囲に限って配湯をするという、当今はポンプとか配管の材料がよくなりまして、そういったことができるようになりました。現在、こちらの湯本温泉館から上流は三〇〇メートルほど、下流は約一キロの区間に限って、この区間でしたら温泉が冷めずに使えるということで温泉を給湯しています。



昔から「砂噴き湯」といわれた砂湯露天風呂にクルマを進めて参りますと、上流にはダムがみえてまいりました。

高さが七十四メートル、幅が一九四メートルという結構大きなダムでございます。奥には周囲

五十五キロという巨大な湖がございます。このダムの下流にじつは湯原温泉のもともとの姿、さきほど申し上げた露天風呂をいまに伝える場所が一カ所あるわけでございます。クルマに乗ったままご覧いただけます。対岸へ架かる吊り橋にクルマを載せたいのですが二トンの重量制限がございますので、このクルマは二トンを超えますので、半分だけ載せて車窓なら露天風呂をみていただけます。

川床の砂を吹き上げながら自然に湧いている露天風呂でございます。ここで、「砂噴き湯」と古くからいわれております。でも、湯原温泉的にはいちばん価値のないお風呂でして、別の言い方をいたしますと、地元では「ホイト湯」、「乞食湯」、「牛馬湯」というような言い方をしておったようです。といいますのは、温度がほかの、さきほどの温泉街のほうと比べますと、こちらはちょっとぬるかったわけですね。三十八度、四十度、四十二度

というところですが。温泉街のほうですと、ここから二〇〇メートルほど下流ですが、そちらは五十度近くございます。それと比べますとぬるかったということです。

## 環境と観光の関わり



右に流れます川は、旭川と申します。ひるぜん高原を源に流れておりまして、このあたりにはまだ自然がいっぱい残っております。この川のなかにはオオサンショウウオがおります。われわれはハンザキと言いましてマスコットにしております。

ヌイグルミにしたり、昔から焼き物で箸置きにしたりしております。もうひとつは可愛らしい鳴き声を聞かせてくれますカジカガエルですね。さらにホタルも飛ぶという自然のいっぱい残るところなんです。

ところがわれわれが観光をやっておりますと、われわれも、お客さまもあまり環境に対して配慮したことがございません。どうしてもそういったものを壊しがちな構造になるわけでございますが、今後はそ



ういうことではいけないなということで、少なくとも川の流をきれいにしようということで、川に流してしまっていた天ぷら油を集めて、じつはそれを使ってクルマを走らせるといった事業をはじめております。このロンドンタクシーによるエコツアーは天ぷら油を使っております。

## 温泉薬師の由来

左側のほうには温泉のお薬師さんがございます。これは古くから湯原温泉が湯治場でございまして、湯治に来てお亡く



なりになった方、願いが叶わずにお亡くなりになった方もあるわけですが、そういった方をお祀りしているところがございます。ここであまりおカネ儲けをしたいとか愛をかなえてとかいったことをお願いするのは筋違いでございますね。

## 鼓嶽、鼓橋、つつみの湯



クルマのほうは再び「つつみ橋」のほうに帰って参りました。いまここは湯原の名所のひとつになっております。右側の奥の山のほうは「つつみ岳」と呼ばれておりまして、この「つつみ橋」の上で手を叩きますと、こだまが鼓のように返ってきて「ポンポン」というわけですね。ということで、昔から「つつみ橋」「つ

づみ岳」と言われております。で、新しくこちらに「つつみの湯」という手湯足湯ができて、ここは夜になるとライトアップされます。「つつみの湯」に浸かりながらライトアップされたつつみ岳をご覧いただくのもオツなものでございます。

## ごみステーション

それではここでちょっと奇妙なものをみていただきます。こちらのゴミステーションなんですけれども、この横にポリタンクが置いてあるのはお気づきでしょうか。これは旅館だけでやっているのではございませんで、住民のみなさんにもご協力いた



ゴミステーションに設置された回収容器

だいて天ぷら油関連の事業を進めております。おかげさまで一カ月三〇〇〇リットルを超える量が集まっております、年間にいたしますと約四万リットル。地球一周が約四万キロです。このクルマは一リットルあれば十四キロ走ります。ということは四万リットルの天ぷら油で地球を十四

周できるだけの燃料が生産できるようになったというわけですが、そう聞いていただくとけっこうすごいでしょ？これが湯原のEDF、天ぷら油の、さきほどの環境にやさしいひとつの事業でございます。

## 湯尻としての住民専用の湯場と 自由に利用できる足湯

温泉の話に戻ります。こちら、湯尻、湯のお尻ですね。緑色のテントが張ってありますけれども、ここは地元の方専用のお風呂兼洗濯場なんです。日中は奥さんがたが洗濯に利用され、夜はご入浴に使われる場所です。こちらには足湯もございますが、これも湯尻です。この湯のお尻はなんのためにあるかといいますと、さきほど申しましたとおり各旅館に冷まさずに配湯いたしますけれども、そのためには配管の終わりの部分で



お湯を捨てなければならぬいんですね。たまったままでは湯が冷めてしまうわけです。そのためこういった湯尻を系統ごとに設けまして、常にお湯を捨てております。ただ捨てるのはもったいないので足湯にしたり洗濯場として利用しているわけです。いま川ぞいに走っておりますけれども、この少し下流のほうにも同じく湯尻が設けてございます。このあたりには野鳥もたくさん来ます。いまはカモぐらいしかおりませんけれども、朝にはカワセミ

が参ります。

こちらが二カ所目の湯尻でございます。右側に足湯という形で湯尻としてございます。それから、クルマの正面をみていただきますと、道路の下になぜか窓があるんです。その下から湯がとうとうと流れ捨てられております。これはさきほどと同じく洗濯場兼入浴施設でございます。こういうような湯尻の場所では、お客さまは申し訳ないのですけれどもご利用できません。お使いいただくためには翌日居残りをしていただいて、夕

シを持って掃除のお手伝いをしなければならないという昔からのきまりごとになっております。

## ロンドンタクシー以外の 旅館のEDF送迎車

天ぷら油の話に戻ります。年間四万リットルというご案内をいたしました。もちろん、このロンドンタクシー一台で走らせて



いるわけではございませんで、各旅館による市内の送迎に使っております。こちら左側に置いてあるクルマもそうですね。EDF、天ぷら油で走るクルマには、前にシールが貼ってあります。エコ・ジーゼル・フューエル、略してEDF。現在、温泉街のほうでは十五台をこの燃料で走らせており

まして、年間四万リットルがちょうどいい案配で使われきっております。これにはいちおうルールがあるんです。あくまでも市内の送迎。といいますのは、この燃料は地元のみなさんのご協力できているということ、もうひとつの大きな理由は、この燃料を使いますと、二酸化炭素がゼロであるということと同時に、硫黄酸化物などがないんです。ほとんど出ません。ばい煙もふつうのディーゼルと比べますと三分の一以下でございます。せっかく地元で生まれた燃料ですので、地元の環境をよくするために地元で走らせようということなんです。遠距離の送迎につかう大型バスに使いますと四万リッターなん



の送迎につかう大型バスに使いますと四万リッターなん

かではとても足りません。でも、市内の送迎に使うという約束のもとで、ちょうどいい案配に使われております。

## 独楽の博物館、独楽と たたら製鉄の関係

橋を渡りまして、こちらは向湯原という地域です。ここには独楽の博物館がございます。世界三〇〇〇種類のコマ、そしてコマ曳きの実演がご覧いただけます。お客さまご自身で絵づけのほうも楽しんでいただけます。じつはここでぜひ考えていただきたいのが、湯原温泉で何故、独楽が?ということでございます。



昔、ここいらは「たたら場」がたくさんございました。『もののけ姫』の世界でございまして、ひと山で三〇〇〇人とか五〇〇〇人とかというような多くの方が働いていたわけです。そこで働かれる方のための生活道具としてお盆やお椀をつくる木地師がおりました。お盆

やお椀のほうは廃れてきてしまったのですが、観光のお客さまにお求めいただいていた独楽が最後に残って、木地の伝統文化を残しておるということでございます。

## エコ教室と環境のシンボル はんざきセンター

場所のほうは移動しておりまして、真庭市の湯原支所に来ております。じつはこの湯原支所、ご覧いただきますとおり懐かしい形でございます。木造の、わたしの通いました小学校なんです。その後、湯原町の役場を経まして、合併後は真庭市の湯原支局になっております。この二階にエコツアーの教室を設けておりまして、大勢さままでご参加いただいた場合には、支局の二階にある昔の可愛らしい教室でエコのお話をちょっと聞いていただいたあとにこの Rondontaxi で町をご案内します。また、人数が多いときは、このマイクの音のほうはワイ

ヤレスで飛んでおりますので、マイクロバス等のラジオに流しながら、いちどに--最高では百名ていどをご案内することもございます。けっこういま人気のツアーになっております。



この場所にはもうひとつの見どころがございます。さきほどご案内いたしました湯原温泉のマスコットであるハンザキですね、国の特別天然記念物“オオサンショウウオが、こちらにはハンザキセンターがございまして、その生態がご覧いただけます。ハンザキセンターの後

ろには昔から湯原温泉がいかにかにハンザキを親しんだかということで、「はんざき大明神」というのをお祀りしてございまして、八月八日にはそのお祭りが大々的に繰り広げられます。いまやどちらかといいますと観光のお祭りになってございまして、道中ばやしや花火大会など、夏の風物詩を展開してございます。

## めっちゃエネルギー自給率の高い町

ここでちょっとエネルギーの話になります。くるくる変わる話の展開にビックリされるかもしれませんが。日本のエネルギーの自給率はわずかに四パーセントということはみなさんよくご存じだと思えます。なんか原子力を入れると八パーセントぐらいまで上がるんだそうですけれども、この日本のなかで非常にエネルギーの自給率が高いのが、この湯原温泉でございまして。ある数字によりますと八十五パーセント、場合によっては九十パーセントを自給できているのが湯原だそうでございまして。そのひとつのは、もちろんこの天ぷら油で走るクルマも多少は寄与しているかと思うのですが、もっとも寄与しているのは右手にございまして発電所です。さきほど露天風呂をご覧いただいたときの砂噴き湯の上流にございましたダム、周囲五十五キロの湖の水



をこちらに導きまして発電をしております。第一、第二の発電所がございまして、あわせると四十万キロワットの電力がつくられております。それと沸さなくてもいい、また自然噴出、ようするに引っ張り揚げてない温泉があります。これらに天ぷら油のクルマをあわせますと、エネルギーの自給率がメチャクチャ高いということになるわけです。



みなさんのところで石油が止まってしまい、石器時代に戻るようなことがあったとしても、湯原は大丈夫というわけです。食料の生産のほうもトラクターで天ぷらあぶらを使い、そして電気のほうもあるということで街の灯りもつき賑やかであるということでございます。万が一のときには、ぜひ湯原温泉に避難してください。

湯原温泉と言われるのはここまででございます。およそ一キロを走ってきましたが、湯原大橋の前までです。この橋の下には最後の湯尻がございまして、湯を洗濯場や入浴の場として地域のみなさんに利用いただいております。ここでも湯尻としてお湯を捨てておりますから左右にございます大きな旅館や保養所等でも蛇口をひねりさえすれば熱いお湯が出るという湯原では魚骨方式と呼んでいる仕掛けでございます。

## 後半に続く<

<https://www.net626.co.jp/temp/eco-noguti2.pdf>